TFEI端末の憂鬱

影御津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＦＥＩ端末の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ２２０３Ｃ

【作者名】
影御津

【あらすじ】
キョンと長門有希は涼宮ハルヒによって、始まりの日の翌日である七月八日に飛ばされた。そこで彼等は高校生活を謳歌するために色々と画策していく。

第０話：プロローグ（前書き）

涼宮ハルヒシリーズらしく基本的にキョンの一人称です。プロローグである為、台詞は一切出てきません。予めご了承下さい。

第０話：プロローグ

俺はサンタの存在を、最初から信じていなかった。
ただ、宇宙人や未来人や超能力などといったアニメ的特撮的な存在たちが、この世に存在しないのだと思っていたのは相当後になってからだった。
しかしながらそれらは存在していたのだ。
学区内の県立高校に進学した俺は超常的能力をもったハルヒや情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース、所謂宇宙人である長門や未来人である朝比奈さんや限定的超能力者の古泉などといった面々の存在を見て納得しないわけにはいかなかったさ。

そして現在、俺はとんでもない事になっている。
俺は今、中学生になってここに存在しているのだが何故そんな事になっているのかというとハルヒのせいに他ならない。
長門も戻ってきており、ハルヒ曰く俺と長門が付き合い始めたのが気に食わなかったとの事だ。
そしてハルヒはやり直せたらいいのにと無意識的に願ったらしい。
改変に気付いた長門は自身と俺の記憶をシールドする事で対処したので、かつての記憶を保持したまま存在できている。
その後、長門はまず自身の今までの記憶を情報統合思念体に報告、ある提案を進言しそれなりの行動の自由を認められた。
その提案とやらなのだが俺そっくりのＴＦＥＩ端末を作り出し俺の思考パターンをコピーしてハルヒとくっつけ、ハルヒの一生を一番近い場所で観測し続けさせるとの事だ。
俺はそいつの双子の兄という事でいくらしい。

俺自身も長門を変えた事で自律進化の可能性があるとして観測対象

らしいのだが、
…しかしながら俺も長門と同じ存在にされるとは思わなかった。
情報統合思念体への接続や情報改変こそ行えないが、身体能力や知力の向上、更には死ににくかったり情報統合思念体の自動制御による情報改変の無効化などここまで俺の身体が改造されるともう人間では無いだろう。

ちなみに俺のコピーは早速キョンと呼ばれている。
…しかしながらコードネームもキョンとはあまりにも酷くないか？
かつての俺の名はそこまで価値がないのかよ…

俺は現在リョウとあだ名で呼ばれているが一応名前で呼ばれる事はある。
だがキョンに関してはかつてのキョンであった俺でさえも名前を覚えていない。
…っていうか強制的に忘れさせられている。
不憫だ…

取り敢えずは長門と共に中学校生活を謳歌し、来たるべきハルヒをキョンに押しつけて。今度こそ、長門と高校生活を謳歌するのだ。

第0話：プロローグ（後書き）

殆ど状況説明で終わらせてしまいましたが、次からは他の人物も登場します。

第1話：入学式と前回との違い（前書き）

ハルヒはまだ出てきません。

第1話：入学式と前回との違い

今日は北高の入学式である。今日という日が来るまで色々な事があった。
それは朝倉涼子の存在が大きく関与している事が一番占めているといっても過言ではない。

俺の家に同居していた長門に付随する形でいきなり住み始めて、俺に迫る朝倉とそれを阻止しようとする長門の争いはとても激しかった。
この時、朝倉は恋愛感情というのが理解できなかったらしく、その為に同じ存在である長門を変えた俺に迫ったらしい。
ただ、誤算だったのは恋愛感情を理解した時、本気になってしまったらしく俺もうっかり手を出してしまった事だ。

その時の長門は無表情ながらも、ものすごく恐ろしかった為、あまり思い出したくないのが正直なところだ。
朝倉は特例として認められたが、今度こそ他の人に手を出したらこの世の地獄とは思えない程の折檻を受けるだろう。

「リョウ君、早くしないと遅刻するわよ？」あぁ、朝倉か…もうこんな時間か…確かにもう家を出ないといけないな。
「急ぐべき、初日から遅刻するのはとても恥ずかしい」
長門も俺を急かしてくる。
そういえばキョンは何処にいるんだ？
「キョンはもう、家を出ている。残っているのはわたし達だけ」
「そうか、じゃあ行くか長門、朝倉」
そして家を出ようとしたら
「涼子って呼んでって言ったでしょ」

「ダメ、有希って呼んで」
止められた。
あのぅ、長門さんと朝倉さん？
それだけは勘弁してもらえないでしょうか？
「わたし達は恋人同士でしょ？」
朝倉…瞳を潤ませながら言われると負けてしまいそうになるじゃないか…
「…ダメ？」
…長門、そんな捨てられた子犬のような顔をされると…
「…せめて、学校では名字じゃダメか？」
二人にはこの辺で折れて貰わないと…
「…リョウ君にとっては、わたし達はそのぐらいの想いでしかないんだ…」
「…そうなの？」
そんな事言われて了承しなかったら俺が悪いみたいではないか。
仕方ないこうなれば二人の為だ。
自棄になるしかないだろう！！
「判った！！判ったから有希も涼子も早くしろ！！遅刻しちまう！！」
「うん！！」
本当に嬉しそうに返事をする涼子と、コクリと一見無表情に見えて嬉しそうに肯定の意を表す有希を引っ張って北高へ急いで向かう。

結果的には何とか間に合った。
多少のズルは問題ないだろう、ハルヒにバレなければという前提ではあるが。

俺は有希と同じ6組、涼子とキョンは観測対象であるハルヒ、かつての級友である谷口、国木田と同じ5組である。
今は自己紹介の最中であり俺はもう終わっている。

「長門有希、恋人はリョウ」
有希の自己紹介は唯、それだけで終わったが教室内は、男共の怨嗟の声と女子の嬌声に包まれ、俺に突き刺さる怨念の籠った視線に晒された俺は居心地の悪さを感じていた。

だが、それだけでは終わらなかったのだ。
5組での自己紹介の時間で涼子は
「…恋人は募集してません♪6組にリョウ君がいますから」
…などと、ぶっちゃけてくれた為に、ただいまリアルタイムで怨念がより強力にかつ殺意と嫉妬の混じった視線に晒されている。

この事は確実に校内に伝わり鬼畜だの、たらしだ等と言われる事であろう。
その反面、キョンの方は付き合っているヤツがいない為に（まぁ、ハルヒの観測の為に存在しているからな）谷口や国木田と前回より早く親密になっているらしい。
…主に、谷口が俺の事を鬼畜だの、自分に分けやがれだのといったことを愚痴っていた事を、後にキョンに聞かされた。

ついでにハルヒについては全く前回と変わらない自己紹介だったらしい。
まあ、未来人の朝比奈さんと超能力者の古泉、そして俺達宇宙人組がハルヒの周りに集まる事は確定しているのだが。
そういえばハルヒは付き合うなら普通の人間じゃないヤツがいいと言っていたな。
良かったじゃないかハルヒ、今回はちゃんとした宇宙人（キョン）と恋人になれるぞ。

入学式から一週間たったがキョンも涼子もハルヒにいまだ相手にされていない。

キョンは前回の俺と同じ行動をしているし、涼子もそれをトレースしながら行動している為、前回と違い涼子もハルヒに近付けるだろう。
有希は前回と同じく文芸部に入部したが俺と涼子とキョンは部活に入っていない。
ＳＯＳ団を文芸部室に作らせる為にはこれが一番いいと有希が言ったからだ。
だからといって俺と涼子はすぐに帰宅するような事はせず、有希と一緒に文芸部室で時間を潰している。
「…そういえば、有希の谷口的美少女ランクが前回より上がってるみたいだぞ」
有希は前回と同じ場所に座って分厚いハードカバーから顔を上げて
「そう…」
とだけ言ったが
「ねぇ？リョウ君、その谷口的美少女ランクって何なの？」
食い付いてきたのは涼子の方だった。
「まあ、何だ…一年の女子全員を谷口がランキングしたモノだ」
本当に谷口は女子に嫌われるような事をしている自覚ができていないな。
「わたしのも…あるの？」
涼子もやはり気にするのだろうか？
「前回も今回も涼子はＡＡランクプラスだ」
ピクって有希が反応している。
「ふーん、まあわたしはリョウ君がいるから関係ないけどね♪」
有希は涼子の名前が出てきたせいか気になったらしい。
「わたしは？」
勿論有希のもある。
「前回がＡランクマイナー、今回はＡランクプラスだ」
前回と違いそれなりに喋るようになったので上がっている。
ただ、前回は眼鏡っ娘のイメージがあり、外した時のランクを俺は

知らない、今回は最初から眼鏡をしていないので単純に比較出来ない。
谷口に眼鏡属性があるかどうか知らないしな。
「涼子に負けた…」
有希はキュルキュルと高速で何かを呟き
「谷口洋平を敵性と判定。当該対象の有機情報連結の解除を申請する。
…許可を」
有希は俺に許可を求めるがそんなもん却下だ。
勿論、情報統合思念体も却下した。
「…了解」
有希は残念そうにいう。
「…俺にとっては二人共、ＡＡＡランクだか安心しろ」
こう言っておけば二人共、納得するだろう。有希だけに言うと今度は涼子がむくれるからな。

ところでハルヒは、まんま前回と同じ行動をとっているのだろうか？
「変わらないわよ。色々な部活に参加しては辞めて、次々と渡り歩いてるもの」
やはりな、アイツの不思議探しに合うような部活は存在しない。
前回と同じ様に文芸部室を乗っ取ってＳＯＳ団を作るのだろう。
いや、正確には言えば今回は作らせると言った方が正しいな。

有希は本をパタンと閉じた。
「時間ね。帰りましょう…リョウ君、有希」

学校から帰って自宅でくつろいでいると妹が
「リョウ君、リョウ君、キョン君どこいるの？」
と、訊いてきた。
そういえば妹が原因なんだよなキョンの名が定着したのは…

「俺は知らん。有希や涼子なら分かるんじゃないか？」
…二人は確実に把握している筈だ。
「うん！有希ちゃんたちに、きいてくる～♪」
妹は俺の部屋から出ていった。

しかし、考えてみれば妹も不思議の塊だよな
…小５でありながら舌ったらずの喋り方もあいまって幼女にしか見えない上に、誰からも「妹」としか、認識されていないんだからな。
前回、ハルヒは「妹ちゃん」、有希は「妹さん」と呼んでいた。
今回は有希と涼子は「義妹さん」と呼んでいる。
二人の今のところの野望は妹に「お義姉さん」もしくは「お義姉ちゃん」と呼ばせる事らしい。

あぁ、今日も平和な一日が終わる。
この平和がもうすぐ終わる事が分かっている俺は、この平穏が長く続く事を祈られずにはいられない。

第1話：入学式と前回との違い（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第３話！」
キョン「違う！次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第２話：ハルヒ襲来」
ハルヒ「何よ！！襲来って！？」
リョウ「…俺達にとっては襲来だ」

なんとなくアニメの次回予告を引用してみました。

第2話：ハルヒ襲来（前書き）

ハルヒ初登場です。

第2話：ハルヒ襲来

四月も半ばのある日、今日も文芸部室でくつろいでいると我が恋人である有希は唐突に語り始めた。
「…明日、涼宮ハルヒがやって来る」
…何？…アイツが来るのか？
「そう…」
…なんてこった。こんなに早くハルヒが来るな…いや、待て…時期的にまだ早い。
…という事は、おそらくハルヒの一日体験入部ってところだな。
「…涼宮さんって、本当に変わってるわよね。
…いろんな意味で」
涼子…いくら事実だからといって…
…いや、ある意味そう言えなくもないか。
「…確かにな…アイツは普通の常識については非常識なくせに、非常識に対しては異常な迄に常識を持ちだすからな」
ハルヒは非常識なモノを求めてる筈なのに、それらを常識に当てはめてようとする。
ハルヒにとって世間一般のあらゆる常識に何もかも当てはまらなかった場合のみ、ハルヒの求めるモノがあるという感じだ。
「…わたし達から見たら涼宮ハルヒの方が非常識」
やっぱり有希から見ても変だよな。
「…とても、ユニーク」

次の日、文芸部室に涼宮ハルヒは襲来した。
「失礼するわよ！」
バン！！と騒々しく扉をあけ、欠片にも思ってない事を言いながらズカズカと入ってくる。そしてオレに気付いて
「…あれ？アンタなんでこんなトコにいんのよ？文芸部員だったの

？」
ハルヒよ…人違いだし、そもそもオレは今回はまだ初対面だ。
「…えーと？オマエ誰だ？」
オマエの事は知っているがとぼけさせてもらう。
「はっ？アンタ自分から話し掛けてくるくせにあたしの名前知んないわけないじゃない！！涼宮ハルヒよ！涼宮ハルヒ！！」
…だから知ってはいるんだよ！
「…えーと…涼宮さんとやら、あなたは多分オレの双子の弟と勘違いしていらっしゃるかと…」
「…えっ？」
ポカンとするハルヒ。
「事実ですよ…涼宮さん」
涼子がオレの言った事を肯定する。
「…ア…アンタ朝倉！？朝倉もいるわけ！？」
人の彼女に対して、出てはいけないモノが出た…みたいな感じで驚かれると非常に腹立たしいのだが…
「…ま…まぁ、いいわ。それから今日はあたしがここに仮入部してあげるわ！」
ハルヒは「有り難く思いなさい！」と、言外に含ませながら言う。
「…それじゃ、アンタ名前教えなさい！アイツとソックリで見分け付かないじゃない！」
なんで、そんなに偉そうなんだオマエは？
…まるで、オマエの方が最初から文芸部員だったかのように振る舞うな。
「…リョウとでも、呼んでくれ。
…それに俺と涼子は文芸部員じゃない。
…文芸部員はそこにいる有希だけだ」
俺が指差す方向を見たハルヒは有希に近付き
「…あなたが正式な部員ね？あなたの名前教えてくれない？」
有希は本からハルヒに視線を向け

「…長門有希」
それだけ言ってまた本に視線を落す。
「…何だか人形みたいな娘ねぇ…」
そう、思わず呟いたハルヒに有希は

「…わたしは人形じゃない…」

前回はともかく、今はちゃんとした感情を持っている有希は怒りを抑え込みながら言う。
そのだなぁ有希…その言い方は、ＥＶＡの綾波レイそのものだぞ？
…という事は…ハルヒは惣流・アスカ・ラングレーか？
…ヤバいぐらいにハマってやがる…

「…あー…ゴメン、さっきのはあたしが悪かったわ」
流石のハルヒも、まずいと思ったのか謝る。
「……いい」
有希も流石に観測対象に対して怒り続けるわけにはいかないらしく許す事にしたらしい。
「…はいはい、そのくらいにして…皆で仲良くね」
委員長体質の涼子が場を和らげる。
…涼子…オマエがいてくれて助かるよ。

その後は何事もなくすすみ俺は安堵の溜息を吐いた。
「…どうしたの？」
涼子か…いや、そろそろ終わるなと思ってな…
「そうなんだ…」
そして有希が本を閉じて終わりを告げる。
「さーて、帰るか…」

ハルヒも本を閉じて
「…もう終わり？あたしは先に帰らせて貰うわ」
ハルヒはそう言うとサッサと出ていった。

…ふ～っ、何とか無難に終わったな…
「…有希、よくキレなかったな？」
「…平気」
有希はそう言い
「…何とか抑えきれた」
…何とか？…抑えきれた？…何をだ？
「…本当に大変だったのよねぇ。主流派ったら有希よりもキレちゃって何するか分からなかったんだから」
…情報統合思念体ってそんな存在だったか？
「わたしと有希と急進派と穏健派が抑え込まなかったら乗り込んできてたわよ…絶対」
…いつの間に親バカになってるんだ？
もっと合理的な存在だった筈だが…
「貴方が疑問に思うのは当然」
「…リョウ君と一緒にいたわたし達は二年半の間ただ一緒に居ただけじゃないの、情報統合思念体はずっとわたし達の精神状態を記録し続けていたのよ」
「勿論、貴方の精神状態も記録されていた」
…それで？
「情報統合思念体は記録から今迄理解出来なかった人間の精神観念を理解した」
「そして、理解しただけでなく感情というモノも得られたのよ」
そうなのか…
「…最初に得た感情はね。親子間に置ける愛情」
「元来、目的の為に造られたわたし達を娘と認識した情報統合思念体は、わたし達を道具として扱うのを辞めた」

それは良かったな…
「情報統合思念体は貴方に感謝している」
「自律進化の可能性という目的だけでなく、わたし達に…感情というモノを与えてくれたリョウ君に」

涼子は突然、思い出したように
「…あぁ、そうそう今わたし達は情報統合思念体の事なんだけど、お父さんって呼んでるのよ」
「わたしも呼んでいる」
…何故…いきなり俺にそんな事を？
「お父さんって呼ぶと喜んでくれるのよ。主流派なんか有希にパパと呼んでくれ！…なんて言うぐらいだもん」
…おいおい、主流派変わりすぎじゃないか！？
「…あれはかなり恥ずかしい」
言うのも恥ずかしいだろうが、パパと呼ばせようとする主流派の方が恥ずかしいとは思わないか？そうだろ有希？
「…否定はしない」
そうだろう！身内の恥程恥ずかしいモノはない！
「まぁ、それはいいのよ。本題はね…」
涼子…そこはかとなく嫌な予感がするんだが…
「お父さん達がお養父さんと呼んで欲しいんだって」
なっ！？お養父さんと呼べというのか！？
「…主流派はパパでもいいと言ってる」
パッ！？パパだと…そんな事恥ずかしくて言えん！
「わかった！！これからはお養父さんと呼ぶ！！」
俺は即決した…長引いてパパと呼ぶ嵌めになるよりずっといいからだ！
「…これでわたし達は婚約した事になるのよね？」
…何？
「…だって、そういう意味なのよ？」

……確かにそういう意味に取れるな…
「…大丈夫」
何が大丈夫なんだ有希？
「情報操作は得意。重婚が可能なようにしてある」
そっちかよ！っていうかいつの間にそんな事したんだよ！
「…あなたが涼子に手を出してから」
…俺が原因なのか…
「そう」
…じゃあしょうがないな、うん。
「勿論わかっているとは思うけど…」
有希はそう言い
「他の人に手を出したらお仕置」
「わ…わかってる！わかってます！」
有希の事だ…涼子にナイフを持たせて最大限の恐怖を引き出した上でお仕置するだろう。
…アレは…恐い。

つまりこれからは気をつけなければならない事が多くなるという事だ。
ＳＯＳ団が結成されれば朝比奈さん、鶴屋さん、喜緑さん…いや、喜緑さんは現状でも危険だ。気をつけなければ！
…取り敢えずそれらの女性と接する機会が増える。
不用意に扉を開けて朝比奈さんの生着替えシーンなんて見る事の無いよう気をつけなければならないな。

第2話：ハルヒ襲来（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第６話…」
キョン「訂正、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第３話：黄金週間とＳＯＳ団」
リョウ「…やれやれ、平穏な時間が終わってしまうのか」
キョン「何を言ってるんだ兄貴。そんな事分かりきってただろう？」
リョウ「それでもなんだよ…」

第3話：黄金週間とＳＯＳ団　（前書き）

今回、キョン側の描写が入り普段よりも長めの話です。

第3話：黄金週間とSOS団

キョン：SIDE

オレはキョン、この銀河を統括する情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース…
…というよりは対涼宮ハルヒ観測専用ヒューマノイド・インターフェースそれが俺だ。
全く厄介な事だがオリジナルキョンつまり俺の兄貴と対外的になっているリョウは涼宮ハルヒとの接触を避けたがった為に俺が誕生したという訳だ。任務でなければ俺とてアイツと関わりたくは無いんだ。
どうして情報統合思念体はオリジナルの思考パターンを模写したのだろうか？
何故、オリジナルの記録をコピーしたのだろうか？
ああ、俺は平穏を望んでいるのに…

ゴールデンウィーク明けの一日目。俺は学校へと続く坂道を歩いていた。
「よ、キョン」
後ろから肩を叩かれた。阿呆面した谷口だった。
「ゴールデンウィークはどっかに行ったか？」
「小学生の妹を連れて田舎のバーさん家にな」
…兄貴は長門と朝倉と一緒に旅行だが…
「しけてんなぁ」
「お前はどうなんだ谷口」
どうせコイツも変わらんだろう。
「ずっと、バイト」
谷口だからな…そんな事だろうと思った。

「似たようなものだろうが」
…全くだ。
「キョン、高校生にもなって妹のお守りでジジババの御機嫌伺いに行っててどうすんだ。高校生なら高校生らしい事をだな…」

…いい加減鬱陶しく感じた俺は谷口に対して兄貴の事を言った。
「…兄貴は長門と朝倉と一緒に二泊三日の温泉旅行に行ってたがな」
いいよなぁ、温泉…
「…なっ！？三人で温泉旅行！？」
何故、驚くんだ？谷口…
「ああ、そうだ」
…本当に独りでもいいから温泉に行きたかった…
「そんな所業が許されていいのか！？二人はリョウの毒牙に掛けられちまったのか！？」
あ？何を言ってるんだ谷口よ。
もしかして、今迄兄貴が手を出しては無いと思ってたのか？
「兄貴はとっくに中一の時から長門に手を出してるし、朝倉には中二の時に手を出してる」
まぁ、朝倉は予定外だったらしいが…
「んなっ！？もうとっくに毒牙に掛けられてたのか！？しかも中一の時から！？」
いい加減理解したようだ。
「そんな事ぐらい察しろよ…餓鬼じゃないんだから」
完全に硬直した谷口を置いて面倒な坂道を登っていく。
…俺は遅刻したくないからな、早く来いよ谷口。

その後数日が経ち、おれと朝倉が涼宮ハルヒと会話が成立し始めた頃の休み時間、谷口が真面目な様で阿呆にしか見えない面提げてやって来た。
「お前と朝倉、一体何をしたんだ？

涼宮ハルヒが人とあんなに長い間喋ってるのは初めてみるぞ」
その後ろから国木田が顔を出した。
「昔からキョンは変な女の子が好きだからねぇ」
…別に好きな訳じゃない。
…任務だからだ。
「キョンが変な女を好きでも構わん。俺が知りたいのはキョンと朝倉が涼宮ハルヒと会話を成立させている事だ」
そんな事は簡単だ。アイツの気を引く話題を出せばいいだけだからな。
「キョンも変な人間にカテゴライズされるからじゃない？」
…失礼な。
「それってわたしも変な女にカテゴライズされてるって事かしら？」
朝倉の登場で国木田は焦る。
「あっ！？朝倉さん！？別に僕はそんなつもりじゃ…」
「気にするなよ朝倉、例え朝倉が変な女でも兄貴は絶対気にしないからな」
キョンは変な女が好き＝兄貴は変な女が好きという事だからな。
「キョンく～ん、わたしの事はお義姉さんでいいって言ったじゃない」
兄貴が情報統合思念体をお養父さんと呼んでくれる様に言われた時、俺に対しても長門と朝倉は俺にお養姉さんと呼んで欲しいと言ってきた。
一応気をつけているがたまに、言い間違える時がある。
…だが、学校に於いては名字で呼んで言い筈じゃなかったか？
「朝倉がキョンの姉だとおおぉぉぉ！？」
谷口は阿呆みた…阿呆な叫びを上げる。
「…あっ？忘れてたわ…ごめんね弟くん」
…今、確信した。
我が養姉は兄貴との事を更に風潮する為にわざとやったのだと。

「…キョン、俺達友達だよな…」
谷口が胡乱な目で俺に言う。国木田まで同調して意味もなく頷いてる。
…養姉達は売らんぞ…阿呆共。

リョウ：ＳＩＤＥ

ゴールデンウィークから数日が過ぎ穏やかな放課後を三人ですごしていた時にソレは来た。
「これからこの部屋が我々の部室よ！」
ノックもせずに入ってきたハルヒはそう言った。
…今日だったのか。
さようなら平穏な日常、こんにちは物騒な非日常。
「文芸部の人はどうするんだよ」
ハルヒと共に来たキョンはそう言った。
まあ、予定通りなんだが…
「別にいいって言ってたわよ。
昼休みに会った時に、部室貸してって言ったら、本さえ読めれば構わないってね」
「…そうか」
…あぁ、以前は俺があそこに立ってたんだよな。
「あなた達も構わないかしら？」
ハルヒは俺と朝倉にそう言った。
「別に構わないわよ」
「ああ、有希が了承してるなら構わない」
キョンと俺達とで大分扱いが違うな。
キョンだった時は、拒否権どころかいつも命令口調で、こうやって訊かれる事も無かったからな。
「これから放課後、この部屋に集合ね。絶対に来なさい。来ないと死刑だから」

キョンは不承不承ながら頷いていた。
「…で、書類の方はどうするんだ？」
苦労しているなキョン。
「そんなもんは、後からついてくるのよ！」
ハルヒは高らかにのたまう。
「まずは部員よね。人数は足りてるからいいとして、やっぱりここにはいない萌え系の部員が必要ね」
人数が足りててもやはり朝比奈さんが必要なのかハルヒ？
…とは言ってもそうしないと朝比奈さんが困る訳だが、
…来たら来たでハルヒに弄られる運命な訳で…
「…萌え系？」
幾ら俺の記録で知ってるとはいえ、キョンは萌えを追求するハルヒに戸惑ってるな。
「そうよ！萌えよ！
人選に於いては安心しなさい。うってつけの人材に心当たりがあるわ」
…ご愁傷さまです。朝比奈さん。

昨日と同じ様に放課後をすごしているとキョンが来た。そしてしばらく経ってからハルヒがやって来た…朝比奈さんを捕獲、誘拐してな。
「ごめんごめん！遅れちゃった！捕らえるのに手間取っちゃった！」
ハルヒは朝比奈さんを無理矢理引っ張ってズカズカと部室に入ると鍵を閉めた。
「なんなんですかー？」
朝比奈さんは半泣き状態だ。
「ここはどこなんですか、なんでわたしを連れてこられたんですか、なんで、かか鍵を閉めるんですか？一体何を…」
「黙りなさい」
ハルヒの重くて静かな声に、ビビった朝比奈さんは固まった。

「紹介するわ。朝比奈みくるちゃんよ」
沈黙が部室に蔓延する。
朝比奈さんは今にも泣きそうだ。
「まあいい…何故、ええと朝比奈さんか。なんでこの人なんだ？」
キョンもなかなか酷い奴だな。
…自分が被る被害を減らしたいのか？
「まあ見てみなさいよ」
ハルヒは朝比奈さんを指差し、
「めちゃめちゃ可愛いでしょ」
アブナイ誘拐犯のような事を言い出した。
…前回と同じで、何故そんな危険な発言をするんだハルヒ。
「それにそれだけじゃないのよ！」
ハルヒは朝比奈さんの背後に回り、後ろから抱きつき胸を鷲掴みにした。
「どひぇぇぇぇ！？」
「背丈は小さいのに、あたしより胸がでかいのよ。ロリ顔で巨乳、正に、萌え系で我が部にうってつけの娘でしょ」
そして、ハルヒは朝比奈さんを離して、
「みくるちゃん、何か部活やってるんだったらそこ辞めて。我が部の活動の邪魔だから」
朝比奈さんは救いを求めて回りを見渡した時、俺達に気付いた朝比奈さんは驚愕し、しばらくして、
「そっかー…」
と呟き、
「わかりました」
と言った。
「でも文芸部って何するところなんですか？」
「我が部は文芸部じゃないわ」
目を丸くする朝比奈さんに、キョンがハルヒに代わって言った。
「あなたが入るのは、そこの涼宮がこれから作る活動内容未定で名

称不明の同好会です」
何気なく、退路を塞ぐキョン。
「…えっ…」
朝比奈さんはそれきり言葉を失っている。
「大丈夫！名前なら、たった今、考えたから」
「…言ってみろ」
期待ゼロのキョンの声が響く。
知ってはいるが出来ればあまり聞きたくない。
そんな俺達の思いに関係なく涼宮ハルヒは命名の雄叫びを上げたのだ。

お知らせしよう。何の紆余曲折もなく単なるハルヒの思いつきと俺達の思惑により、新しく発足するクラブの名は今ここに決定したのだ。
ＳＯＳ団。
世界を大いに盛り上げる為の涼宮ハルヒの団。
略してＳＯＳ団である。

第3話：黄金週間とSOS団　（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第３話…」
キョン「それは今回だ！次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第４話：転校生、古泉一樹の入部」
キョン「やっとＳＯＳ団（前回）のメンバーが揃うのか…」
ハルヒ「何よ？その揃うって？」
キョン「何でもない。気にするな」
リョウ「禁則事項だからな」

第４話：転校生、古泉一樹の入部（前書き）

今回は、結構堅苦しい所があるかもしれません。

第４話：転校生、古泉一樹の入部

ＳＯＳ団の結成宣言後、ハルヒが毎日放課後ここに集合ね、と全員に言い渡し、この日は解散となった。この後の朝比奈さんの後ろ姿はあまりにも哀れを催したがキョンは、
「まあ、諦めて下さい。アイツはあんなヤツなんで」
前回の俺とは全く違う言葉を吐く。
「…大丈夫です。それに…」
朝比奈さんは続けてポツリと呟く。
「おそらく、これがこの時間平面上の必然なんでしょうね…」
朝比奈さんは俺達を見て。
「それにあの人達が気になるし…」
俺達四人はそれを聞き流した。
朝比奈さんは自分が呟いたことに慌てて、照れ笑いをしながら、
「…えと、不束者ですが、よろしくお願いします」
「ええ、よろしくお願いします」
キョンはそう言い。
そして、この日は終わった。

その後、コンピュータ研からパソコンを強奪したり、この時は部長が哀れだったので俺達所有の最新型高級モデルを極秘裏に貸し出した。何故、ＳＯＳ団で使用しないかと言うとＳＯＳ団の活動で使用されるよりコンピュータ研で使われる方が俺達には良かったからだ。勿論ハルヒは知らない。
ＳＯＳ団のホームページを前回と違い三分で仕上げたし、暫くしたある日の放課後には、ハルヒと朝比奈さんがバニーガール姿でビラ配りをしたりした。
ちなみに有希と涼子は俺の彼女であった事と予算の都合で見送られた。

その二日後、部室で俺は有希と涼子と喋ってる時、
キョンと朝比奈さんがオセロをして時間を潰していた時、
ヤツは来た。
古泉を引き連れて。
「へい、お待ち！」
古泉の袖をガッチリと掴んで。
「一年九組に本日やってきた即戦力の転校生、その名も…」
ハルヒは古泉を見て、そして古泉は俺達を見て言った。
「古泉一樹です。…よろしく」
「ここ、ＳＯＳ団。あたしが団長の涼宮ハルヒ。そこの五人は団員
その一と二と三と四と五。ちなみにあなたは六番目。みんな、仲良
くやりましょう！」
何故、前回と同じなんだ？
前回と違って五人も居るのに言い辛くないのか？
「入るのは別に良いんですが、何をするクラブなんでしょうか？」
当然の問題だ。疑問に思わないヤツがいたら見てみたいね。
「教えるわ。ＳＯＳ団の活動内容、それは…」
ハルヒは溜めに溜めて、ぶっちゃけた。
「宇宙人や未来人や超能力者を探し出して一緒に遊ぶ事よ」！

全世界が停止したかに思われた。

訳は無く、俺と有希とキョンは前回の事を知ってるので問題無かっ
たが、残りの涼子、朝比奈さん、古泉はそうもいかなかった。
涼子は完全に硬直していた。
前回のＳＯＳ団にそれらの人間がいた事は知ってはいたが、まさか
ＳＯＳ団の活動内容がそれらと遊ぶ事にあったとは思ってなかった
ようだ。
確かにそうだろう。既にそれらの人間が集まっているのだから。

今回もＳＯＳ団を設立する為に、自分達が動いていたつもりが、この為に実はハルヒに動かされていたんじゃないか？
と、思っても不思議じゃない。
朝比奈さんも完全に硬直している。
目と口を開けたまま、ハルヒを見たまま動かない。
それはそうでしょうね朝比奈さんは、大きな時間断層の原因で、時空に歪みを発生させたハルヒの監視の為に未来から来たのに、まるでハルヒに呼ばれたかのようにしか見えないですからね。
古泉は微笑を浮かべて硬直している。
そりゃそうだろうな。ハルヒに超能力者にさせられた理由であるし、閉鎖空間を発生させない為に来たのにハルヒの思惑のまま転校してきたのだから。
古泉は他の二人より先に我に返った。
「はあ、なるほど」
と呟き、俺達を何度か見て頷いた。
「流石は涼宮さんですね。
…いいでしょう。入ります。今後とも、どうぞよろしく」
古泉はキョンに手を差し出して。
「古泉です。転校してきたばかりで、わからない事があるかと思いますが、その時はよろしくお願いします」
キョンは古泉の手を握り返した。
「ああ、俺は…」
「ソイツはキョン」
ハルヒが有無を言わさずに紹介する。
「あっちの萌え系がみくるちゃんで、そっちの男がキョンの兄のリョウで、その両脇にいる小柄な娘が有希、ロングヘアーの娘が涼子よ。
ちなみにその二人の娘はリョウの彼女」
と俺達を指差した。
古泉は「あなたもなかなかやりますね」と言っているかの様に見え

た。
ゴン！
鈍い音がした。朝比奈さんが、立ち上がろうとした時、蹴つまずいてオセロ盤に顔を打ち付けたのだ。
「大丈夫ですか？」
朝比奈さんが、首を必要以上に振り、
「…はい」
と、言った。
俺達以外に前回と変わらない展開が不思議なような感じがするな…
「そういう訳で、謎の転校生を加えて六人、あたしも入れて七人もいるわけだから、これで学校にも文句を言わせないわよ」
いや、絶対認めないって生徒会の奴等とか。
…それに一応有希はまだ文芸部に所属したままだ。

その後、ハルヒは学校案内と言いキョンを引き連れて古泉を連れ出し、朝比奈さんは用事があるというわけで先に帰ってしまったので、部室には俺達宇宙人組だけが残された。
「そういえば、今日は有希に宇宙人と打ち明けられた日でもあったな」
俺はふと思い口にしていた。
有希は肯定の意味でコクリと頷いた。
「今日だったんだ？」
口にはしないが、涼子は詳しく聞きたがっているようだ。
「ああ、最初は信じられなかったんだけどな」
あの時、一般人であった俺はとても信じられなかった。
…有希の電波話だと思ってたぐらいだ。
「じゃあ、どうして信じられる様になったの？」
…涼子、ある意味本人を前にして言うのは俺でも戸惑うんだが…
「…朝倉涼子が独断で行動した事が原因」
代わりに有希が代弁する。

「朝倉涼子は彼を教室に呼び出し殺害して、涼宮ハルヒの出方をみようとした」
涼子はそんな事したの？みたいな顔をしている。
「情報操作の異常を感知したわたしは殺害される前に天井部分の空間閉鎖の緩い場所から侵入」
あれはギリギリだった…
「朝倉涼子は説得に従わなかった為、当該対象の有機情報連結を解除した」
流石に、涼子は俯いている。
「…なるほどね。道理で最初、リョウ君が必要以上に警戒したのか解ったわ」

「…あぁ、でも今は気にしてないぞ。前回の朝倉と今の涼子は違うわけだしな…」
「…ありがとう…リョウ君」
あぁ、そうだ。今回、急進派がどう動くんだか訊いておくか。
「…涼子、今回は急進派がどう動くんだか知ってるか？」
涼子がその事をどう思っているかも訊きたいが…
「今回、急進派は動かないわよ。あくまで観測に徹するの…前回の事で情報統合思念体の存続に悪影響を与え兼ねないと総意で判断したから」
有希が涼子の説明を補足する。
「今回は観測及び、情報統合思念体の存続に影響を与えない程度に涼宮ハルヒを随時修正していくのが目的」
要約すると、
「つまり、情報統合思念体に影響力を発揮しそうな状況にもっていかせないようにする事か」
そういう事なんだろうな。
「そうゆう事、わたしだって現状に満足してるし、涼宮さんに改変される様な事態になるのは困る訳なの」

誰だって現状に満足してればそうだろう。
「涼宮ハルヒの性格を考慮すれば、存在や生命の危機に陥る事態は、余程の事がなければないと推測する」
まあ、ハルヒも悪いヤツじゃないしな。
「例に例えれば、前回の朝倉涼子によるあなたの殺害が仮に達成されていた場合、情報統合思念体は消滅していた可能性が大いに有りえたと、情報統合思念体は判断している」
…嫌な例えだな。
「例えば誰かが殺された、殺したヤツが許せない、指示したヤツも許せない、殺された事が許せない、なにより原因そのものが許せない、
とハルヒが思えば、実行犯が消滅し、主犯が消滅し、死んだヤツが生き返る…と言うよりはその事実が消滅するということだろう」
これは前回の俺ではちんぷんかんぷんだっただろう。
宇宙人モドキになって頭が良くなって無かったら解らない説明だ。
「そうなの。それに有希の例だと、涼宮さん自身が消滅する可能性も高いわ」
「原因の一つだからか…」
自分で自身を無意識で消滅させる可能性があるなんて、とても厄介な能力だな…

…やれやれ、どうやら俺達は涼宮ハルヒという名の神様に翻弄される事に変わりはないらしい。
ある意味古泉と同じだな、今度は古泉と完全に協力した方がいいだろう。
ほぼ同じ目的を持っているんだ。
その方がより安全な学校生活を送れるからな。

第４話：転校生、古泉一樹の入部（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱第２話…」
キョン「それはもう終わってる。次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱第５話：ＳＯＳ団本格始動」
みくる「すっ涼宮さんに剥かれます～！？」
キョン「諦めて下さい。アイツはああいうヤツなんで」

第5話：SOS団本格始動（前書き）

原作とほぼ変わらない展開の所は省略しています。

第5話：ＳＯＳ団本格始動

翌日の放課後。オレはハルヒに追い出され部室の外で待っていた。
「…あれ？兄貴どうしたんだ？」
キョンは掃除当番だったのだろう。遅れてやってきた。
「今、涼宮が剥いてる所だ」
オレはキョンに一言で説明する。
「…ああ、例のヤツか…」
キョンと待つ事十分。
「いいわよ、入っても」
ハルヒの御許しが出た所で俺達は室内に入る。

メイドさんがいた。

朝比奈さんのメイド姿…これでよりＳＯＳ団らしくなった気がするな。
「あれ？キョンも来てたの？まあ、いいわ。
どう、可愛いでしょう」
朝比奈さんには悪いがやはり似合ってるな。
「まあ、それはいいとして…
我が部としては、みくるちゃんに萌えを追求してもらわなきゃ困るのよ」
…やはり萌えか…
「学校を舞台にした物語には、こういう萌えキャラが必ず一人はいるものなのよ」
…いたかなぁ？
「言い換えれば萌えキャラのあるところに物語は起こる…と？」
って、キョン？
お前はハルヒの言う事が理解できるのか？

「キョン、あんたもなかなか話が分かるじゃない。
みくるちゃんというロリーで気が弱くて、でもグラマーっていう萌え要素を持つ娘をメイド服を着させる事で、萌えは更にパワーアップするわ」
ハルヒはデジカメを取り出し、
「記念に写真取っておきましょ」
朝比奈さんは嫌がりながらもハルヒに無理矢理ポーズを取らされ、激写されていた。
「キョン、カメラマン代わって」
ハルヒはキョンにカメラを差し出す。
「了解」
キョンは普通にそれを受け取る。
俺はというと朝比奈さんが可哀相ではあったが、有希達の方へ行って見ない事にする事にした。
「涼子…大丈夫か？」
若干顔を青くした涼子がいた。
「…うん。…まさかわたしもあんな格好させられたりする事あるのかなって思っちゃって」
…ないとは言い切れないな。
「…まあ、平気だろう」
有希はというと、
「情報操作を開始、大気中の不要物質の情報連結を解除、眼鏡を再構成」
眼鏡を再構成していた。
そして、有希は、
「これ」
ハルヒに眼鏡を手渡した。
「へっ？眼鏡？」
ハルヒは有希に手渡された眼鏡を見て、
「ナイスよ！有希も分かってるわね！」

そう言ったハルヒは朝比奈さんに眼鏡をかける。
「有希のおかげで完璧よ！ロリで巨乳でメイドな眼鏡っ娘！素晴らしいわ！キョン、ジャンジャン撮りなさい」
…有希、その為だけに力を使ったのか…
「みくるちゃん、これから部室にいるときはこの服を着なさい」
そう言い放ったハルヒはセクハラをエスカレートさせる。
「そうだ！あんたも一緒にエッチィ事する？」
ハルヒは何を思ったかキョンを誘う。
朝比奈さんは顔を青くしたが、キョンは追い討ちをかけるように、
「…するか」
朝比奈さんは一気に真っ青になる。
「うわ、なんですかこれ？」
入り口付近で立ち尽くした古泉がいた。
「何の催しですか？」
「古泉君、いいとこに来たわ。皆でみくるちゃんに悪戯しましょう」
俺達を巻き込むな！
「遠慮しておきます。後が恐いので」
そう言い椅子に座る古泉。
「まあ、もういいか。写真もいっぱい撮ったし」
ハルヒは団長席に戻り、
「ではこれより、第１回ＳＯＳ団ミーティングを開始します！」
そう言い前回と同じ様なやり取りをした俺達は市内を周る事が決定した。
「次の土曜日！つまり明日！朝九時に北口駅前に全員集合！来なかった者は死刑よ！」

土曜日の朝八時半に俺達は北口駅前に集合し、八時四十分に古泉が、八時四十五分にハルヒと朝比奈さんが、やってきた。
ちなみに最後の奴は罰金なんてのはなかった。
ハルヒめ自分の方が遅かったから言わなかったんだな。

喫茶店で行動予定を決めた俺達は、３グループに別れた。
俺、古泉組
キョン、朝比奈さん組
ハルヒ、有希、涼子組
という班分けになった。

「で、どうするんですか？」
古泉が俺に訊いてくる。
「ああ、チョット話したい事があるんだがいいか？」
その為に班分けした訳だしな。
「…話、…ですか？
構いませんよ」
河川敷まで行き半径３００ｍ付近に人がいないか確かめて、
「…涼宮の事なんだが…」
古泉は変わらぬ笑みを浮かべながら、
「…涼宮さん…ですか？」
「お前は組織の人間だろう？」
古泉は一瞬だけ真面目な表情になり、
「…まさか、いきなりそんな事を訊かれるとは思いませんでしたよ」
表情を元に戻して言う。
「まあ、つまりは同盟を組んでくれという話だ」
古泉は頭が良いこれだけでも意味は通じるだろう。
「…貴方は全部知ってるんですね。
…なら話は早いです」
俺は情報統合思念体の涼宮ハルヒに対する目的を話す。
「俺達というか、我々情報統合思念体は、総意で涼宮ハルヒの観測及び情報統合思念体の存在に、悪影響を与えないよう修正していく任務を与えられている」
古泉は真面目な顔になり、
「僕達、組織の人間は涼宮さんによる世界の破滅を阻止することが

目的です」
やはり今回もそれか…
「要約すれば、お互い世界規模の情報改変を阻止する事が目的である事に違いはない」
俺にとってもハルヒに改変される事態は好ましくないしな。
「…故に同盟ですか？」
「ああ、情報統合思念体はそちらに協力する事で、情報改変の可能性を出来るだけ少なく済ませたいんだ」
前回のようにはなって欲しくないからな。
「…組織の方で一度話し合わなくてはいけませんので少しだけ待って頂けませんか？」
…確かに古泉は組織の一構成員に過ぎないからな。
「それはこちらも分かっているさ。出来るだけいい返事を期待してる」

「…しかし、そちらは随分消極的な感じがしますね。涼宮さんを観測しに来たという割にはですが」
「情報統合思念体にとっては観測そのものはたいして重要じゃない。むしろ、現在は必要以上に干渉して俺達の存在を危険に晒したくないんだよ」
あの時の事で分かった事なんだが…
「なんだか、僕のイメージしてた宇宙人像とは随分かけ離れていますね」
古泉はいつもの笑みを浮かべながらも冷や汗が流れているのを俺は見た。
「養父にとっては娘以上に大切なモノはないからな」
親バカだし。
「長門さんと朝倉さんですか？」
古泉は冷や汗を拭う。
「ああ、自律進化の可能性より娘が大事、危険な事態になれば本人

（？）が飛んで来るだろう」
古泉は苦笑いして、
「なかなか過激な方のようで…」
「ああ、だから古泉の方にも協力して貰いたいんだよ」
古泉は暫く考え込んだ後、
「…そうですか。わかりました。その事に対しては組織の一人としてではなく、古泉一樹個人として貴方達に協力しましょう」
少なくとも個人として協力してくれる事を約束してくれた。
「…助かる」

その後、俺達はただ、ひたすらに街をぶらつくだけで終わった。
前回と違い古泉の人隣りを知る為に、俺は色々と訊いたり、こちらの事を教えたりした。
勿論、前回の事もだ。流石の古泉も驚いていた。
時刻が十一時三十分になったところで北口駅前に戻る。
今からなら十一時五十分には着く筈だ。
古泉に「何故戻るんですか？」と訊かれ、ハルヒが集合をかけるからだと言うと「おおよその未来の事がわかるのは良いですね」と言った。
朝比奈さんみたいに禁則事項に縛られていないので、俺はとぼっちりを回避するのに未来の事を言わないなんて事はしない。

第5話：SOS団本格始動（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第６話…
キョン「違う！次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第６話：本格始動の裏側…って合ってるし！」
みくる「…わたしは未来から来たんです」
キョン「知っていますよ。朝比奈さん」
リョウ「ハルヒ以外は全員ね」

第６話：本格始動の裏側（前書き）

今回はこの作品におけるオリジナルの時空間概念における説明が大半を占めてます。

第６話：本格始動の裏側

ここではオレと古泉が取引を行なっていた間における、他の面々の奴等について語ろうと思う。

キョン：ＳＩＤＥ

俺と朝比奈さんは他の奴等と違う方向にて探索をしていた。
探索している場所は河川敷である。
兄貴もこの上流の方で古泉との同盟交渉をしているだろう。
「わたし、こんな風に出歩くのって初めてなんです」
川を眺めて歩いていた朝比奈さんは呟く様に言った。
どうやら未来というのは思った以上に不自由なところのようだ。
…もしかしたら未来人組織というところが不自由な組織ということになっているかもしれないが。
「こんな風にとは？」
朝比奈さんは恥ずかしそうに、
「…男の人と、二人で…です」
「誰かと付き合ったことはないんですか？朝比奈さんなら今迄に、付き合ってくれと言われてもおかしくないでしょう？」
朝比奈さんは俯いて、
「ダメなんです。わたしは誰とも付き合う訳にはいかないんです。少なくともこの…」
朝比奈さんは言いかけて黙る。
この辺は、人通りが少なからずある。流石に未来人である事を察せられるような事は、迂闊に言えないと踏んだのだろう。
「キョン君…お話ししたい事があります」
桜の下のベンチに座った俺は、同じく座っていた朝比奈さんにこう

言われた。
「わたしはこの時代の人間ではありません。もっと、未来から来ました」
やはり、その事か…
俺達が気になるのはどの時間軸の朝比奈さんか？ということだ。
「いつ、どの時間平面からここに来たのかは言えません。言いたくても暗示に掛かっているので言えないんです。だから必要上の事を言おうとしても自動的にブロックが掛かります。そのつもりで聞いて下さい」
朝比奈さんが、語るのを取り敢えず聞いているか。
「時間というものは連続性のある流れのようなものでなく、その時間ごとに区切られた一つ一つの平面を積み重ねたものなんです」
朝比奈さんが、語る事と俺の認識はほぼずれていないと判断していいかもしれないな。
「一つ訊きたいんですが？」
朝比奈さんは首を傾げる。
「はい？なんでしょうか？」
「貴方はどの時間軸の朝比奈さんなんですか？」
俺は一つの疑問を投げ掛けた。

「…えっ？」

朝比奈さんは驚いて言葉が出ないようだ。
「朝比奈さんが、この時代に何の目的で来たのかは知っています。…それとこの時代は一度、世界的レベルで改変されています。貴方達未来人は、かつて自分達の未来は過去に起こった事が起きないと自分達の未来が消えると言っていました」
大人の方の朝比奈さんですが…
「…しかし、貴方はここにいる。前回の貴方と同じなのか、この改変された時代の未来の貴方なのか、我々は知る必要があるんですよ」

これについては、情報統合思念体も涼宮ハルヒの観測以上に重要事項だと総意で判断している。
「…と言っても貴方は禁則事項に縛られていて、こちらで推測するしかないのが実情ですが」
朝比奈さんは自分の存在を詳しく知っている俺を見ながら驚き、黙って話を聞いている。
「できうる限りはこの時間軸の未来の貴方であれば面倒がなくていいんですけどね」
もし、違うのなら情報統合思念体は強行手段に移る必要性が出てくる。
「あえて言いますけど、本質的に未来人は過去に干渉しなくても問題ないんですよ。干渉したがるのは自分の未来を守る為、というのは分かりますが、結果的に意味など全くない」
既に改変されて、別の流れになっているこの時代を見れば明らかな事。
「例えて言うなら、仮に過去に行ける技術を抹消しようと過去に行ったところでそれを防ごうとする者達によって阻まれる。
…それは既に必然なんでしょうね」
流れが一つならばね。
「…仮に抹消出来たとしても、それはその技術のない未来を一つ作るだけの事、仮にその事で自分の未来を抹消出来たとしてもその時点で、自身の存在も行なった経緯もなくなるならば意味がない。過去に干渉した事、事態が消えますからね」
朝比奈さんは時間における新しい概念に驚きを隠せない。
「…すると、その時間軸は永遠にループすることになる。つまり永遠にそれ以降の未来は消滅する事になります」
朝比奈さんは俺達の概念における干渉する事の意味の無さ、あったとしてもそれがとんでもない事態を引き起こす事を知り、顔を真っ青にしている。
「…そもそも未来人は己の為に過去に干渉してきますが、その更に

未来の人間に干渉される事を良しとできるのかが不思議ですけど」
…これが不思議なんだよなぁ。
まあ、基本的に干渉する側だから深く考えていないんだろう。
「…そ、それは…」
やはり、朝比奈さんも考えてなかったようだ。
「自分より更に未来の人間に、「貴方が生きていると自分達の未来がなくなる」と言われておとなしく殺されたいと思いますか？」
俺は嫌だぞ。
「…いっ！？嫌です！」
朝比奈さんは思いっきり否定する。
「…まあ、朝比奈さんの当初の知っている通りの考え方でいいと思いますよ。仮にこの時代を改変しようとしても、未来には反映されないと」
俺は朝比奈さんを安心させる為に言う。
「…そうなんですか？」
その言葉を聞いて朝比奈さんも安心したようだ。
「ええ、前回までは情報統合思念体でさえも調整を行う必要性はあると判断していましたが、実際この改変された時代がある。
…改変された世界である事を涼宮ハルヒは認識していないし、認識していないものを元に戻す事もできない。
…有希義姉さんの場合とあまりにもケースが違いすぎて対処は不可能。
…なら、世界は常に分岐していると判断してもいい。
…それが我々、情報統合思念体の得た新しい時間の概念です」
そして、追記する。
「…もしくは、流れは一つで似た様な平行世界が無数に分岐していくのではなく。無数の平行世界が一つ一つお互いに干渉する事なく流れているのかも知れませんけどね」
朝比奈さんは先程の話とは違う話に戸惑いがあるようだ。
「…分からないんですか？」

俺は正直に答える。
「…実際、分かりませんよ。情報統合思念体でさえもね」
それは結局、誰にも分からないし、理解できないのかもしれないな。
…取り敢えず、俺は兄貴と有希義姉さんが改変される前の記憶を持っている事。
改変される事態になった理由。
そして、兄貴に変わって涼宮ハルヒの観測係兼、鍵となる為に、情報統合思念体によって造られたＴＦＥＩ端末である事を話した。
「…やっぱり、キョン君が鍵なんですか…」
「ええ、そうなるように、前回とほぼ同じになるように行動をトレースしましたから」
そう言ってから、俺達は適当に街をぶらついて時間を潰し、十一時五十分に着くように北口駅前に戻っていった。

有希：ＳＩＤＥ

正直に言えば特筆すべき事はない。
涼宮ハルヒと朝倉涼子の両名と涼宮ハルヒの言う不思議探索を行なっている訳であるが、そうそうそのような事態があるわけがなく。
彼と一緒にいられないわたしと涼子はハッキリ言ってつまらなかった。
仕方ないと言えば仕方ないのであるが古泉一樹と朝比奈みくるに対する説明が不可欠なのは事実。
…それと、将来的に敵対組織の事を考えれば、彼等に早急な協力を求め、信頼関係を構築するのは理にかなっている。
午後になったら情報操作で、リョウとわたしと涼子の三人の班にしよう。
涼宮ハルヒはキョンと一緒の班にして、古泉一樹と朝比奈みくるの班にすれば問題はない。

涼宮ハルヒの機嫌を維持する事ができ、うまく行けば古泉一樹と朝比奈みくるの間で互いにある程度情報を開示し、信頼関係を構築出来るかも知れない。

…リョウと涼子に話してみようと思う。

第６話：本格始動の裏側（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱第７話：ＳＯＳ団のこれから」
キョン「…今回もあってるな…」
リョウ「何時まで続くか分からんがな」
涼子「今度は全く違う展開（前回と違う）なのよね」
有希「そう、完全なオリジナルの展開になる」

今回は、涼宮ハルヒシリーズの逆行における矛盾点を解消するためのオリジナルの設定を説明しました。
涼宮ハルヒシリーズの時間の概念だと、逆行ってハッキリ言ってそのままだと無理っぽい設定になってるんですよね。
ｉｆならある程度はなんとかなりそうですが…

第7話：SOS団のこれから（前書き）

今回、長門と朝倉の壊れっぷりが強力です。

第7話：SOS団のこれから

北口駅前に集合した俺達はハンバーガーショップで昼食を済ませた。この時、班分けは有希の考えに乗った訳になるが、前回と変わらずというかデートしただけで終わってしまった。

週明けの放課後、有希と一緒に部室まで来たのだが、古泉一樹とキョンと涼子の三人しか来ていなかった。

「少しばかり貴方達に訊きたい事があるんですが、よろしいですか？」

古泉は俺達にいつもの笑みとは違い、神妙な顔付きで話を求めた。

「構わないが、何が訊きたいんだ」

「…では、お訊きします。

…何故、貴方達は涼宮さんに、怪しげなクラブを作るように仕向けたのですか？」

なるほど、確かにそうだろうな。オレだって戻ってきた当初は、そう思ってたんだがな。

「…言ってはなんですが、何もしない方が僕達にも貴方達にも都合が良かった筈です」

古泉は、先日話した事を頭に入れて話している。

「…ですが、現状はこの様に涼宮さんは、怪しげなクラブを作り、僕や貴方達の様な存在が集められている」

俺達が集めさせたのか、集めさせられたのか。

…未だに分からんが、規定事項だったんだろうな…

「…一体、どのような目的で作らせたんですか？」

古泉が、もう一度疑問を投げ掛ける。

「理由ならある。我々としても、観測するだけならば作らせる必要もなかったし、キョンがここにいる必要性も薄くなっていた」

有希が古泉の疑問に答える。

「理由は二つ、涼宮ハルヒをコントロールするのに都合がいい事。将来的における各種敵対勢力から、涼宮ハルヒを守るのに都合がいい事」
こいつらのせいで面倒な事態になってんだよな。
「…なるほど、敵対勢力ですか」
古泉は納得したような顔をする。
「貴方の機関と対立する組織、朝比奈みくるの属する組織と対立する未来人組織、そして、我々とは違う地球外意識体、彼等はリスク等気にしない。全てを失ってでも涼宮ハルヒに接触する」
…阿呆だよな…こいつらは。
「…それは厄介ですね」
そう、正に厄介な奴等ではあるが、
「問題ない。我々がここにいるのは、その為」
…そういう訳だ。
「まあ、せいぜい奴等には踊って貰うさ。俺達にとっては奴等の動きは規定事項、ほぼ全て読める」
俺は奴等は所詮脅威ではないのだと古泉に言う。
「そうね。未来人でも無理だわ。わたし達、情報統合思念体にとっては彼等も過去の人間の様なものだもの」
涼子にとっては初めてかもしれないが、情報統合思念体に接続すれば問題はない。
「時空間の概念については彼等よりも我々の方に分がある」
有希は、奴等に勝る根拠を言う。
「つまり、彼等は貴方達のほぼ思った通りに動く訳ですか…」
古泉はそういうが、
「だからと言って手を抜いていい訳じゃない。涼宮ハルヒ如何によって変わってくるからな」
キョンが追記する。
「故に、僕達機関や朝比奈さんに協力を求める訳ですか？」
「そういう事になる。アイツを制したヤツが世界を制する事と同義

だからな」

古泉と未来について話をしていると朝比奈さんがやってきた。
「どうも、遅れましたぁ。
…って、あれ？涼宮さんは？」
ドアを開けての朝比奈さんの第一声は、ハルヒの所在だった。
「アイツは今日は来ませんよ。アイツだったら一人で反省会しながら街を周ってると思います」
俺はハルヒが今日、何をやっているのか手に取る様に分かる。
「えっ？そうなんですか？」
朝比奈さんはハルヒが一人で街を周ってるのを知って驚いたようだ。
「それが先を読めるという訳ですか」
古泉が先程の話の意味を納得する。
「…どういう事ですか？」
朝比奈さんは先程来たばかりで分からないだろう。
俺達は先程の話を朝比奈さんにもした。
朝比奈さんは俺達があえてＳＯＳ団を作らせた（？）理由と敵対勢力や組織について話し、「ふえぇ、そんな話をしてたんですかぁ」と、朝比奈さんは驚きを隠せないでいた。
そして、暫く雑談をしながら時間を潰して今日は御開きとなった。

次の日、俺は朝から一つの懸案事項を抱えていた。今朝、俺の下駄箱に入っていた。ノートの切れ端と栞。
『放課後、誰も居なくなったら、一年五組の教室に来て』
ノートの切れ端は女の字で栞の方はパソコンで打ったかの様な綺麗な明朝体で全く同じ文体で書かれていた。
まさか、あれを再現する気じゃないだろうな？

放課後、部室に行くと有希、涼子、朝比奈さんがいた。涼子に訊いたらハルヒは体調不十分を理由に早退、キョンはハルヒの見舞いに

行き、古泉はバイト（神人退治）だそうだ。
そして、俺はネットを回り、有希と涼子と朝比奈さんは雑談をして、部活を終了した。

有希と涼子は気が付いたら部室から居なくなっていて、朝比奈さんは着替えるからと言われて俺は先に部室を出た。
一年五組の教室の前に着いた俺は、取り敢えず中に入ってみた。
「「遅い（よ）」」
有希と涼子が、俺の予想通りそこにいた。
「一体、何をしたいんだ」
何となく前回と同じでよからぬ気がするんだが。
「したい事があるのは確か」
有希が口を開く。
「チョット訊きたい事があるの」
涼子が有希の言葉に続く。
「人間はさあ、よく「やらなくて後悔するよりも、やって後悔した方がいい」っていうよね」
「…何が言いたいんだ？」
…なんか前回と同じ展開じゃないか。
「じゃあ、例え話なんだけど、現状を維持するままではジリ貧になる事は解ってるんだから、取り敢えず何でもいいから変えてみようと思うでしょう？」
マジでヤバい気がしてきた。
「…そうかもしれないが」
「そう」
しかも、今回は有希もだ。
「でもね、周りにいる人は頭が鈍くて、どうしようもないの。でもわたし達はそうも言ってられない。手を打たないでいたらどんどん面倒な事になりそうだから」
…ん？前回そんな事言ったか？

「だから、わたし達の独断で強硬に認識させる」
なんか前回と違うぞ。
「周りの対応に、わたしはもうウンザリしてるのよ。だから…」
何故か、急に背筋が冷えた。
「あなたを押し倒して周りに強制的に認識させる」
そして有希と涼子が飛び掛かってきた。
「冗談はやめろ！」
俺は避けるが二人は追い掛けてくる。
しかも、情報操作で脱出できる場所がない。
「マジヤバいって！そんなん学校側にバレたら退学だって。だから、よせ！」
もう全く訳が解らん。養父達よ。説明してくれ。
「冗談だと思う？」
俺は避け続けて、二人は未だに追い掛けてくる。
「バレるのってイヤ？見られたくない？わたしには有機生命体の羞恥の感情がよく理解できないけど」
オマエ分かっているだろうが！
「意味は解るが、とても笑えん。いいからそんな事辞めてくれ」
俺は涼子から身を避けるが、
「それは無理」
ガシッと有希に捕まった。
俺は抵抗するが、
「無駄よ。わたしと有希の二人掛かりならあなたを止められる」
完全に動きを抑えこまれて押し倒されてしまった。
「うおぉ、諦めるか！」
俺は抵抗を続けた。お互いの制服はヨレヨレになり、着崩れている。
「終わった」
有希がポツリと言った、
「何がだ！？」
ホント、訳が分からない。

一体、何をしたいんだ！
「情報連結解除、開始」
逃げ回った反動で粉々になった机や椅子が復元し、教室が元の姿に戻っていく。
…って、まさか…
「ういーっす」
ガサツに戸を開けてヤツが入ってきた。
「わわわ、忘れ物」
自作の歌を歌いながらやって来たのは、予想通りに谷口だった。
「ウオゥッ！？」
谷口もこんな時間に俺達が居るとは思わなかっただろう。
のけ反りながら立ち止まり口をパカリと開けている。
しかも、この時の俺は正に有希と涼子を押し倒している体勢にしか全く見えない。
着崩れているから、尚更だ。
「…スマン」
ネクタイを直しながら、何時の日か聞いた真面目な声で谷口は言うと、
「…ごゆっくりー！」
と、コケそうになりながらも、叫びながら走り去った。
「計画通り」
有希がポツリと呟いた時、やっと気付いた。
有希は前回の事件をなぞって利用したのだと。
「どうすんだーーー！！」
と、俺は叫ぶ事しか出来なかった。

第7話：SOS団のこれから（後書き）

ハルヒ「次回、TFEI端末の憂鬱、第8話：SOS団の日常」
キョン「日常か…既にSOS団が日常に組み込まれてるんだよな」
リョウ「そうだな…しかし、今回はオリジナルの展開になるんじゃなかったか？」
キョン「確かに前半はともかく後半は…」
有希「作者の都合、朝倉涼子がこちら側に居て事件が起きない上に、それに関連した事柄は起きない」
涼子「古泉君の正体も最初から知ってるし、それに関連したイベントも消滅。それでオリジナルの展開になる筈だったんだけど」
有希「ネタの為に原作やアニメを見ていた作者が、あのネタを思い付いた為に後半の展開が原作のパロディと化した」
リョウ「そのためかよ！」

第8話：SOS団の日常（前書き）

今回は、キョン視点が三分の二を占めてます。

第8話：SOS団の日常

「…で、何故あんな事（前回参照）をしたんだ？」
俺達はあの後自宅に帰り、俺は有希と涼子の二人を詰問していた。
「…周りがしつこかった」
有希がボソッと呟く
「…それだ、それ、全く意味が解らないんだが」
あの時も言ってたよな。周りは鈍いとか、なんたらと…
「…リョウ君は知らないでしょうけど、何故か男子から迫られるのよ」
涼子は切実な思いで打ち上げる。
「…は？」
だが、俺には全くの意味不明だ。
確か、交際宣言はしてたよな…初日に。
「…リョウ君が二股を掛けてるからっていうのが理由。本当にしつこいんだもの」
ウンザリした顔で説明してくる。
まあ、事実なんだがな。
だが、続けて涼子は物騒な事を言い出した。
「…なかにはあなたを中傷して迫ってきたのもいたわ。その時は有機情報連結を解除してやろうかしらと思ったぐらいよ」
涼子は笑みを浮かべながら言う。

…おいおい、それは拙いだろ。

…しかし、俺は言葉に出すのはためらった。
…だってな、「じゃあ死んで」と前回ばりの殺意も愉悦も感じない笑みをした涼子に口答えできるかよ。
「そう、流石にそれは父に却下された」

有希が残念だったとばかりに言う。
有希は有希で、恐ろしい事言ってるし。
養父の方が、まともな判断してくれて助かった…
「まあ、そいつは代わりに三十路に入る前くらいには頭頂部が完全に禿げ上がるぐらいよ。
…河童みたいにね。そのぐらいの情報操作は許可してもらったわ」
…その当事者が可哀相だが、仕方あるまい。
養父も妥協案で勘弁したんだろう。
…娘に甘いしな。
「…言いたい事は分かった。
…だが今後こういう事は勘弁してくれ」
只でさえ、不名誉な二つ名が付いてるんだ。
…これ以上の二つ名は付けられたくはない。
「…了解」
「…わかったわ」
渋々ながら、両名は頷いた。

キョン：ＳＩＤＥ
翌日、俺は兄貴達より、一足早く学校にいた。
「…あっ、キョン。こんなに早くから来てどうしたのよ？」
ハルヒは珍しく教室に普段より静かに入って来た。
いつもなら、威風堂々と入ってくるんだが。
「あー、ハルヒはもう大丈夫なのか？」
何故、名前で呼んだかというと。昨日見舞いに行った時に、ハルヒが自分の事を名前で呼ぶように言ってきたのでハルヒと呼ぶことになったのだ。
「…うん、取り敢えずはね。
…昨日の事には礼を言っとくわ」
ハルヒは、甲斐外しく礼を言ってきた。
「いや、気にするな」

大した事ではなかったしな。

「キョーーーン！」

…ん？何か聞こえたな。

「キョーーーーン！」

誰だ！人の名前（？）を大声で呼ぶヤツは！

「キョンは居るかーーーー！」

喧しい程の叫び声を上げて、教室に騒々しく入ってきたのは…バカだった。

「うるさい！！アホ！！」

ハルヒは手直にあった筆箱を投げ付けた。

「グブゥオッ！？」

筆箱はバカの頭部にストレートに直撃し、足をよろめかせた。

…見事、と言いたいが、俺のなんだけどな、その筆箱。

「…っ、何しやがんだ！！涼宮！！」

…バカは脅威の回復力で復活した。

阿呆の谷口は化物か！！

「何しやがんだじゃないわよ！朝っぱらから叫ぶな！」

それには俺も同感だ。

「まあまあ、二人共落ち着いて」

後から来たのであろう、国木田が仲裁を買って出る。

「…ふん！」

ハルヒはそっぽを向き、何も言う事はないと無言で語る。

「…んで、一体何の用なんだ？

…というより、朝っぱらから廊下でキョンキョンと連呼しないでくれ」

下手をすると学校中に広まるではないか。

…果ては、教師にまで俺をキョンという呼び名で固定される事になるだろうが。

「…そんな事はどうでもいい。

昨日の放課後、五時半ぐらいにお前…この教室にいたか？」
そんな事だと？…まあいい。
「…五時半頃？いや、俺は放課後ならとっくに帰宅していたが」
ハルヒの見舞いに行っていた事は、敢えて言う必要はないだろう。
「…お前の兄貴が帰って来たのは何時頃だ？」
一体、コイツは何が言いたいんだ？
「兄貴が帰って来たのは六時半ぐらいだが…」
谷口は珍しく難しい顔をして、
「…やはり、アレは見間違いでは無かったというのか」
よくわからん事を呟いている。
「…キョン。お前の兄貴はこの神聖な教室で、朝倉と長門の二人を一度に押し倒す様な鬼畜なんだ」
怨念を纏いながらボソボソと喋る谷口。
何言ってるのか、普通には解らないぐらいの声である。
「…谷口よ。お前は何が言いたいんだ？」
聞こえる声量で喋れってんだ。
谷口は思い切り、息を吸い込み、
「だーかーらー、お前の兄貴は、昨日、この教室で、朝倉と長門を、押し倒してたんだって言ったんだよ、」
教室中に聞こえるように言いやがった。
禄な事しねえな…このバカは…どうすんだよ。
こんな時に、涼子養姉さんが来たら、大変な事になるじゃないか。
「キョンのお兄さんって凄いんだねぇ」
…国木田…呑気な事を言わないでくれ…
教室の中はヒッソリと静まり返り、所々でヒソヒソと会話をしている奴等がいた。

「…あれ？みんなどうしたのかな？静まり返っちゃって」
タイミング悪く、涼子養姉さんが教室に来てしまった。
「…ねえ？涼子」

静まり返った教室の中で唯一人、勇気溢れる女子、花子さん（仮称）が話し掛けた。
そういや、クラスの女子で名前知ってるの…ハルヒと涼子養姉さんだけだ…
「…何？」
涼子養姉さんは訝しげに反応する。
「あのさあ、キョン君のお兄さんに、長門さんと一緒に押し倒されたって、ホント？」
思い切って訊く花子さん（仮称）。
…花子さん（仮称）まで、キョンと呼ぶのか…
「…ねえ？…それって誰から聞いたのかしら？」
…涼子養姉さんは笑みを浮かべながら確認する。
「…ヒィッ！？」
涼子養姉さんの笑みを直視した花子さん（仮称）は気絶した。
涼子養姉さんは倒れた花子さん（仮称）を放って、そのまま笑みを浮かべ、グルッと見渡すと教室にいたハルヒと俺を除く半数が放心し、半数が震えながら谷口を指差した。
「…べ、別にたた、谷口にき、訊いた、訳じゃ、ななな、ないよ！？か、勝手に、きき、聞こえた、だ、だけだから」
国木田は震えながらも、自分に過失はないと言い張る。
確かに、聞こえただけだろうが、ニヤけていたのには変わらないだろうが。
「…く！？国木田！？
テ、テメェだってそれ聞いて笑ってやがったじゃねぇか！！」
谷口は谷口で、国木田を巻き込もうとしている。
二人共、自分だけ助かろうなんて情けないぞ。
「…二人共、チョット良いかしら？」
ゴゴゴゴゴゴと効果音が聞こえてきそうな…そんな雰囲気が、涼子養姉さんから漂ってくる。
…なんだか、涼子養姉さんが幽波紋使いに見えるな。

幽波紋名
『シャイニング・オブ・ハンズ・グローリー』
なんて感じで、光る両手が谷口を貫き、血潮が噴き出すぅ！！
…などと、俺が脳内でふざけてる間にも、涼子養姉さんは既に谷口の真ん前に立っていた。
「…確かに事実だけど、これ以上広めないでね。リョウ君に迷惑が掛かるから」
涼子養姉さんは、そう言うとくるりと回り、自分の席へと戻っていった。
ただ、その時に俺にしか聞こえない声で、ポツリと呟いた。
「…谷口君の発言で、これ以上ウザイ男子が迫る事はないわよね…」
…それを聞いて俺は思った。
…谷口の発言よりも、先程の涼子御養姉様の御様子だけで、十分に効果が御有りで御座いますよ…と。

第8話：SOS団の日常（後書き）

ハルヒ「次回、TFEI端末の憂鬱、第9話：SOS団の日常2」
キョン「次は2か…」
有希「次はわたしの教室の日常がメイン」
リョウ「俺と有希しかいないのに平気なのか？」
有希「大丈夫、エキストラがいる」
キョン「花子さん（仮称）みたいな人か…」

第９話：ＳＯＳ団の日常２（前書き）

今回は、谷口が憐れに思えます。

第９話：ＳＯＳ団の日常２

昨日の事件（前々回参照）のあった翌日。
キョンは珍しく一人で学校に行き、俺は有希と涼子と三人で登校した。
…キョンがいないと俺に対する視線は、それはもう凄まじいモノである。
何故かというと、三人でいる時は、有希と涼子は俺と腕を組んで歩きたがるのだ。
一般人の方々の好奇の視線がビンビンで、独り身の男共からは、嫉妬の視線を常に浴びる事になるのだ。
…カップルの奴等も例外ではない。
たまに恋人らしき人を連れていながら、嫉妬を初めとする羨望や殺意の視線を向ける奴等がいるのだ。
まあ、谷口で言うＡＡプラスランクとＡマイナーランクの二人の女を連れているのだから、解らないでもないがな。
…不良共も例外ではなく、因縁つけて喧嘩を売ってくる奴等がいるが、丁重にお帰り願っている。
俺達は肉体の構成素材こそ、普通の人間と殆ど変わらないのだが、世間一般のアスリートや格闘家等の超人を遥かに超越するスペックがあるのだ。
素人に毛が生えた程度の、不良相手に負ける事など有り得ない。
ボコる程度である内が、奴等にとっては幸せだろう。
その気になれば、涼子にアーミーナイフを持たせてやるだけで、事足りるのだ。

そんな訳で、登校中に晒される視線が、一般人から北高生に変わった頃には学校に着いていた。
涼子と別れ一年六組、つまり自分の教室に着いた頃、一年五組で涼

子が恐怖を振り撒く（前回参照）のであるが、この時はまだ知るべくもない。
「よお、御二人さん。今日も仲良く夫婦で御登校かい？」
話し掛けてきたのは阿部さん（仮称）だ。
言ってはなんだが、俺がクラスメートで、確実に名前を知っているのは有希だけなのだ。…何故か知らないが、クラスメートの名前が記憶に残らないのが、誰かの陰謀か何かだとハルヒのように思ってしまっても不思議ではあるまい。
「ああ、今日は珍しく三人でな」
阿部さん（仮称）にきちんと返事をする。
…この際、名前を出さないのは鉄則だ。
これは名前を知らないクラスメートや、名前を忘れてしまった知り合いに使えるのだ。
追記すれば、久し振りに会った、顔も名前も思い出せない同窓生に親しげに話し掛けられた時に、その場を上手くやり過ごす為に、特に真価を発揮する。
案外自分から呼び掛けなければ、どうにでもなるという一例だ。
「全く羨ましいヤツだな。お前は」
阿部さん（仮称）は、他の野郎と違い嫌味がないのでそれなりに話したりする。
ちなみに阿部さん（仮称）は男だ。
…何故、男にさん付けかというと。
…いい男だからだ。チョット見た目は悪っぽいが、ツナギを着て街の片隅で自動車修理工を営んでいると思うくらいのアニキなのだ。
「…アンタは恋人作らないのか？」
俺は思わず訊いてしまった。
「いや、最近なかなか俺の目に留まるヤツがいなくてね」
うーむ、その気になれば彼女などすぐに出来そうなんだがな。
クイクイっと袖を引っ張られたので、そちらを見てみると、有希が

いた。
「……」
構っていなかったせいか、有希が御不満の様子みたいだ。
…スマン、忘れてました。
「気にしないでいい。彼女の相手をしてあげな」
阿部さん（仮称）はそう言うと自分の席へと戻っていった。
…阿部さん（仮称）は、やはりいい男だよな。

その後ホームルームが始まり、通常の授業をこなしていた訳なんだが…二時間目が終わり三時間目になる前の休み時間にそれは起きた。
「なあ、リョウちゃん！昨日の放課後五組の教室で、朝倉と長門を押し倒したって聞いたんだが本当か！？」
突然、そんな事を俺に訊きにきた奴の名はヒゲ（仮称）。
…とは言っても今名付けたばかりだが…
…しかし何故、オマエが知っている？
…そうか、谷口か！谷口なんだな！あの野郎…必ず何時かブチＫＩＬＬ！！
「…違う」
有希が否定する。有希…お前は俺を助けてくれるのか！

そう俺は思ったが、結果としては裏切られた形となる。
「双方…訂正、三人の同意によるものだから、押し倒したという表現は適切ではない」
…なんて事を言うんだよ。
この時は、あまりの事に驚き、気付いた時には三時間目に突入していたのは余談だ。

そして、俺は昼休みに、いの一番に五組の教室に向かった。
…勿論、有希には部室で待っているよう言っておいた。
「…あれ？…兄貴どうしたんだ？」

五組の教室に入ると、キョンから話し掛けてきた。
谷口はいないようだ。
「…谷口は？」
奴の行方を尋ねる。
「多分、食堂じゃないか？」
キョンも分からないらしい。
あくまで予想だからな。
「そうか…ならキョン、放課後谷口を校舎裏に連れ出してくれ」
目的は一つだ。
「…なん…アレか…」
キョンもすぐに理解した。
「ああ、そうだ」
「…わかった。谷口を連れ出せばいいんだよな？」
「…頼むぞ」
思考回路が似ている為、俺達の会話はスムーズに済んだ。
…しかし、何故誰からの視線を感じとれなかったんだ？
俺が教室に入ると静まり返ったし…俺何かしたかな？

部室で有希と涼子の三人で昼食を済ませた俺は、虎視眈々と放課後が来るのを待っていた。
…放課後になり、俺は校舎裏に行って、奴が来るのを待つ。
暫く待っていると、奴は現われた。
「げっ！？アンタはキョンの…畜生キョンの奴騙しやがったな！女なんて何処にもいねえじゃねえか！！」
…キョンは、なんて古典的な方法で谷口を呼び出したんだ。
…それに引っ掛かる谷口も凄いがな。
「悪いがキョンにお前を呼び出す様、頼んだのは俺だ」
「…なんだ！？制裁か！？この俺を制裁する気か！？」
谷口は俺を問詰める。

よく解ってるじゃないか。
「…待て、制裁の前に先ずは勝負しようではないか！」
谷口が勝負を申し込んできた。
「…なんだと？」
…何がきても負ける自信はないが、何で勝負するつもりだ？
「…今、学校に残っている女子に俺とアンタ…どちらがイケてる男か勝負しろ！」
…俺は呆れていた。あまりの馬鹿らしい勝負に、
「…別に構わんがな」
思わず口に出てしまっていた。

「…勿論、俺が勝ったら朝倉を貰い受ける！」
阿呆な事を言い出す谷口。
…どうせ、無理なんだけどな。
「ホゥ、ならば俺が勝ったら俺は、お前は変態だと、わざと学校の中で涼子達に言いふらせてやろう」
…こういう制裁でも、構わないか…

勝負に関してだが、ハッキリ言って谷口の完敗だった。
あらゆる所に訊きに行き、必死にアピールする谷口であったが。
…逆にその必死さが仇になり、後ろで呆れて佇んでいただけの俺の圧勝だった。
…推測だが、訊いた女子全員の共通の思いは、コイツウザイ…コレしかないと俺は思う。
…俺に関しては、谷口よりはというのと、俺が運動神経がよく、学年ＴＯＰ５の学力がある事を知っている女子が半々というところか。
ちなみに順位でいうと
一位：長門有希
二位：朝倉涼子
三位：涼宮ハルヒ

四位：キョン
五位：俺
である。
だが、点差はハッキリ言ってないに等しいぐらいだが…

「畜生！！何故だ？何故勝てない！？」
谷口は膝を着きうなだれている。
ならば、言ってやろう。何故負けたのかを…
俺は指を一本立てる。
「…たった一つ…たった一つだぜ…」
ここで一拍置く。
「たった一つのシンプルな答えだ…」
そして、俺はポーズを決める。
「…テメェはあまりにウザすぎた」
俺は、俗に言うＪＯＪＯ立ちという姿勢で谷口を指差してこう答えた。

そして、俺は奴に敗北感を与えた後、俺は罰ゲームを与えに涼子達の元へ立ち去った。
その翌日、谷口は変態だと噂される事になる。
…更には、追加効果でウザイというのも加わわり、信憑性が高まったのは谷口の自業自得だろう。

第9話：SOS団の日常2（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第１０話：神人出現」
キョン「…えっ？なんで閉鎖空間が発生すんだよ！」
リョウ「…それは、御約束と言う奴だ」
みくる「もうすぐ、最終回なんですか？」
リョウ「いえ、なりませんよ。原作の涼宮ハルヒの〇〇みたいだと変なタイトルが付きかねませんから」
一樹「確かに、ＴＦＥＩ端末の分裂なんてタイトルが付いたらおかしいですよね」
有希「それと、この話しに関して言えば、消失もなくなる」
涼子「有希が暴走しないからよね」

第１０話：神人出現（前書き）

今回は度々視点が変わります。

第１０話：神人出現

なんて事のない日常が暫く続いていた俺達は、だらけていた。
「…暇ね」
我等が団長様は退屈のようだ。
「…なんか事件とか起きないのかしら！！本当に退屈で仕方ないからキョン！アンタ面白い事ない！？」
あまりにも退屈すぎたのか、日本語さえ適当に喋っているハルヒ。
キョンに暇つぶしの案を訊くハルヒだが、あまり期待できんと俺は思うのだがな。
「…ふーむ、朝比奈さんのコスプレバリエーションを考えてみるのはどうだ？」
朝比奈さんはビクっと一瞬震えた。
…このような発言をする辺り、本当に俺の複製なのかと思ってしまうな。
「…悪くはないけど、いつも道理であまり面白くないわね」
悪くはないのかよ…

キョン：ＳＩＤＥ

ある日の事、俺は自室で考えて事をしていた。
俺はハルヒが退屈しているのを見て、俺は危惧していた。兄貴達も一見だらけているように見えるが、近々閉鎖空間が発生する可能性が高いと思っている筈だ。前回は朝比奈さんが切っ掛けで起こったらしいが、今回はどうなるんだろうか？
そう思いながら、俺は深い眠りに落ちていった。

その直後の事だった。自分の回りの空間が、やけに異質な状態に変

化をしたのは。
情報封鎖によく似ているこの感覚は…

閉鎖空間か！

目を開けて見てみると、色の失せた灰色の影…
そして、学校のリノリウムの、硬くて冷たい床が背中に感じられた。
「…やれやれ、まさか、今夜とはな…」
俺は起き上がって周りの様子を探る。
いつの間にか制服を着ていたが、その事は気にしないでおく。
閉鎖空間を発生させたのがハルヒなら、確実に近くにいる筈だ。

「…周囲の様子を探ってみても、力が制限されていて分からんな…」

どうも、この閉鎖空間では情報操作が難しい。
恐らく、情報統合思念体に接続出来ないのが理由と推測する。
「…地道に探し出すか…」

暫く校舎を歩き回っていると、ハルヒがこちらを見つけたのだろう、一直線に向かって来た。
「キョン！アンタもいたのね！」
…オマエが呼び込んだんじゃねえか！
そう言いたいのをグッと我慢し、それに答えた。
「…ああ、だが俺達以外は誰もいないみたいだ。しかも、学校から出られんしな」
まあ、既定事項のようなモノだから文句は言えないし、これならまだ元の空間に戻れるだろう。
「…やっぱり、そうなのね…あたしも最初に弾かれたわ」
ハルヒも外に出ようとしたと言う。
…むっ？もしや、歩き回らない方が、早く合流できたんじゃ？

俺は早々にハルヒを見つけ出す筈が、どうやら大きな遠回りをしていたみたいだ。
「…それに電気は来ているが、電話回線も繋がらなくて外部にも連絡は取れなかったぞ」内心は別の事を考えていながら、ハルヒと会話を進める。時間が少なくなっている以上、余計な時間はない為、やってもいない事をやった事にして、工程を省くことにした。

リョウ：ＳＩＤＥ

さて、こちらは閉鎖空間の発生を確認したわけだが、
「リョウ君、やっぱりキョン君も居なくなってるわ」
涼子にキョンの部屋を調べさせてみたが、やはりキョンはいないようだ。
「…そうか、一回目の閉鎖空間が、いきなり弩級のヤツになるとは思わなかったな…」
前回は二回目だった筈だが、やはり涼子がカナダに行ってないからかな？
「…リョウ、準備は出来た。キョンが部室のパソコンに電源を入れれば、何時でも回線越しの接触が可能」
有希が一応の準備を済ませてきた。
「…分かった。
…まあ、キョンの奴もやるべき事は分かっているんだから、必要ないかも知れないがな」
前回、俺もやったからな…
…アレ、俺のファーストキスだったんだよな。アイツは覚えてなかったけど。

「…あなたのファーストキスを逃したのは、わたしの最大のミスだった」
有希が俯いて体を震わせている。

…いや、確かにそうなんだが、アレは仕方ないだろう。
「…分かっている。アレは仕方のない事だったと」
有希の拳が強く握り締められた。
…ヤバい、いくらなんでも仕方なかったと言い訳するんじゃなかった！
「…あー、そのだな…アレは別に好きだからした訳じゃないんだぞ？好きな人としてキスしたのは、有希が最初なんだからな」
それを聞いた有希は、フッと身体の力を緩めて俺のパジャマを掴んだ。
「…本当？」
…ぐはっ！？
有希は下から覗き込むように、上目遣いで俺を見た。
…ヤバ、理性が飛びそうだ！その潤んだ純粋な瞳で直視しないでくれ！俺が獣になってしまうじゃないか！
小柄で純粋で健気で儚げでその他諸々な、有希を押し倒したくなる衝動に駆られる。

落ち着け！落ち着くんだ！俺！

キョン：ＳＩＤＥ

俺とハルヒは何もする事がなくて、取り敢えず部室に向かって歩いていた。
…その時だった。
青い光が窓から校内に溢れだしたのは。

…まさか、もう出てきたのか！？

中庭に直立して、出現した青い光の巨人。間近に見た神人はコチラとしても、今の状態ではまともに相手が出来そうではなかった。

「…なによアレ？」
ハルヒが俺の服の袖を引っ張りながらも、神人を指差して呆然としている。
「なんなのよアレは？やたら青くて大きいけど、幻や蜃気楼じゃないわよね」
我に帰ったのだろうハルヒが、興奮しながら興味津々に目を輝かせて神人を見ている。
「アレって宇宙人かな、それか古代文明で造られた超兵器が現代に蘇ったとか、もしくは幽霊や妖怪の類とか！学校から出られないのはアイツのせいなのかしら？」
神人が腕を持ち上げる。
「…拙い！」
俺はハルヒを抱けあげ、ハルヒを傷つけないように背中から窓の外へ飛び出す。
「ちょっ！キョン！」
うまい具合に外へ出られた、と同時に轟音と大気を振動させ、粉塵が撒き上がる。
…あ、あぶねえ…
「…あ、う…」
俺は、口をパクパクさせているハルヒを抱え起こし、ゆっくりと地面に降ろした。
「…平気か？」
俺はハルヒを安心させるように言う。
よく見るとハルヒは顔を真っ赤にしていた。
「…ふぇ！？…だ、大丈夫」
…ふむ、こういうハルヒもなかなか可愛いもんだな。
そんな事を思いながらも、ハルヒの手を掴んで神人から距離を取る為に走る。
更に神人は腕を振り上げ、校舎に拳を叩きつけた。
その一撃によって校舎はいとも簡単に倒壊した。

「キャッ！…全くなんなのよ！？」
離れていたとはいえ、流石のハルヒも、アレに叩き潰されそうになったせいか憤慨する。「なんなのよ、本当に。この変な世界もあの巨人も」
一応、ハルヒが生み出したんだがな…
やっぱりアレか？俺は白雪姫と同じ事をやらんといかないのか？
「…あー、ハルヒは元の世界に戻りたくないか？」
「えっ？」
ハルヒがコチラを向く。
「こんな所に閉じ込められてんのも、億劫だろう。あの巨人が暴れ回ったら、閉じ込められた俺達は危険だぜ」ハルヒは逡巡すると、
「んー、なんかね。不思議なんだけど、なんとかなる気がするのよ。少なくともアレがいる世界の方があたしは楽しいし、今のままでもいいかな」
なにっ！死にそうな目にあってもか！？
「俺は戻りたいぞ」
ハルヒは思い詰めた顔をして、
「…そんなに？」
「…ああ、あの世界も捨てたもんじゃないぞ。段々面白い方向に進んでるんだからな」
ハルヒは俯いて弱々しく抵抗する。
「…でも」
…やはり、最終手段しかないのか…
「俺はハルヒと皆と一緒に過ごせるあの世界が好きだ」
そう言って俺は強引に、ハルヒにキスをした。
暫くの間変化はなかったが、俺は不意に世界が元に戻る感覚を感じた。

目を開けて見るとそこは俺の部屋。服装も元に戻っており、ようやく戻ってこられたのを実感した。

リョウ：ＳＩＤＥ

目覚めるとベッドの中だった。
昨夜の途中からの記憶がなく、何時ベッドで寝てたのか覚えていない。
「…確か、閉鎖空間が発生して、キョンのサポートをするつもりだった筈なんだが…」
そう言いながら立ち上がろうとしたら、やけに柔らかい感触が手に付いた。
そっと見ると裸の俺の両脇に、裸の有希と涼子の二人がスヤスヤと眠っていた。

第１０話：神人出現（後書き）

ハルヒ「次回、ＴＦＥＩ端末の憂鬱、第１１話：元に戻った日常」
キョン「…やっと、一巻目の終わりか」
リョウ「…そうだな」
ハルヒ「次の更新は、何時になるのよ」
有希「暫くはインターバルを置くから、一月程」
ハルヒ「なんでよ！」有希「まだ原作は完結していないから、それが理由の一つ」
涼子「もう一つの理由が、作者が忙しいからよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2203c/

TFEI端末の憂鬱

2010年10月9日12時20分発行